

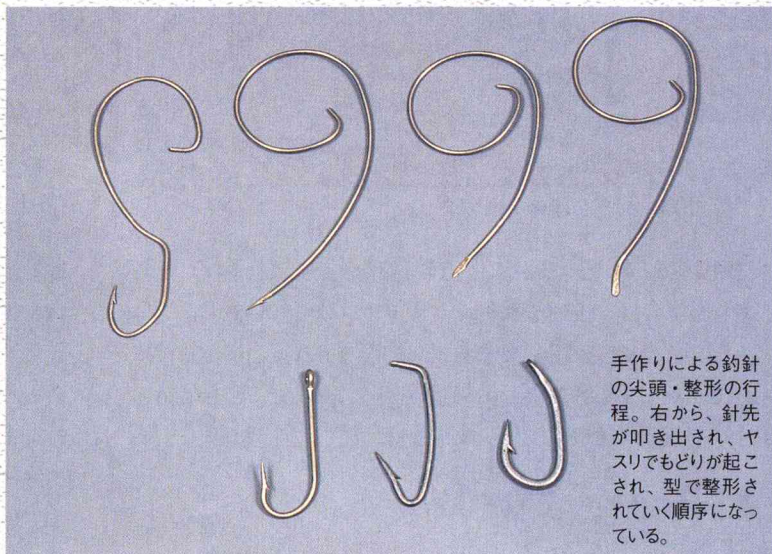
Steel Landscape

鉄の点景

アクア東条（農水省施設）に展示される巨大な鮫・鰻用の釣針。タバコの箱と比べるとその大きさが分かる。



江戸末期から受け継がれる手作り用の仕事台。線材を平たく叩いてやすりで針先をつけ、木型に巻き付けて整形する。仕上げは炭粉を用いて浸炭焼き入れを行う。



手作りによる釣針の尖頭・整形の行程。右から、針先が叩き出され、ヤスリでもどりが起こされ、型で整形されていく順序になっている。

釣針

レジャーとしての釣り人気が続いている。老若男女を問わず楽しめるアウトドアレジャーとして、気軽に足を踏み込めて、奥が深い趣味として、今後もブームをこえた人気が続きそうな気配である。さて釣りに欠かすことのできないのが釣針だが、その国内生産量の約9割が実は兵庫県に集中しているということをご存じだろうか。今回は釣針の里とも呼ぶべき東条町を取材し、釣針作りの技と歴史に注目してみよう。

兵庫県にある釣針の里

日本の釣針産業の約90%は、兵庫県に集中している。そのなかでも特に釣針作りのメッカといえるのが、加東郡・東条町である。兵庫県の釣針業者の多くが、この東条町とその周辺に集中している。先頃、日本一の吊橋が開通した明石市から北へ約30kmほどの山あいの町。いわゆる播州釣針のふるさとである。

釣りがブームと言われるようになってから久しいが、ルアーやゲーム・フィッシングという新しいムーブメントも手伝って、今やその人気もすっかり定着しつつあるようだ。レジャーを目的とした釣り人口は、2,000万とも2,500万ともいわれている。そうしたレジャー用のものから漁業のプロ用まで、国産釣針の大部分が実はこの地で作られているという。日本各地に鉄を材料

とするさまざまな地場産業というものが存在しているが、東条町は釣針がその主役というわけだ。

加東郡で釣針作りが始まったのは、江戸時代末期だと伝えられる。釣針作りの技術が播州に伝わった歴史については、まだ不明な点も多いとされるが、大筋において「職祖」と呼ばれる下久米村（加東郡）の彦兵衛が嘉永4年（1851年）に土佐からその技術を学んで帰ったのが始まりとされている。

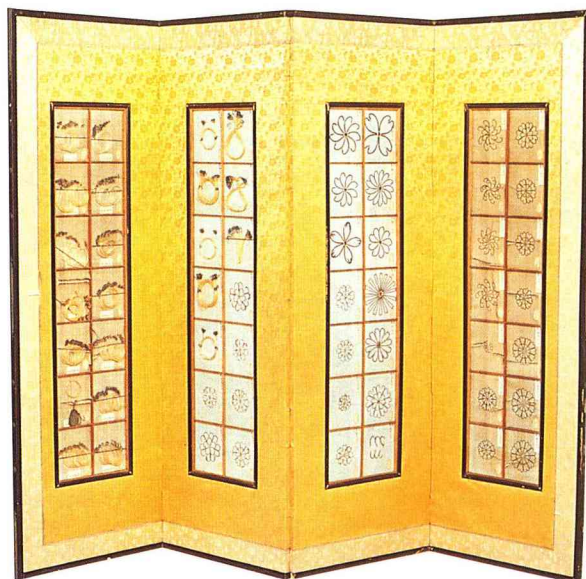
加東郡の南隣にあたる三木、小野にも金物製造の地場産業が存在しており、近辺に金属加工の伝統が受け継がれてきた歴史も存在しており、釣針作りも鉄の流通に関わる地理的なバックグラウンドと無関係ではなかったと考えられる。すなわち



彦兵衛像



昭和初期頃の手作り釣針の見本。



屏風に仕立てられたさまざまな釣針。大正時代の作品と伝えられる。

中国山地でとれた砂鉄が加古川の高瀬舟で運ばれていた背景があり、その鉄の流通や鉄材のリサイクルの流れが加東郡をはじめこの周辺での金物産業を育てたと想像される。また鉄材に加えて燃料である薪や炭の供給地が近くにあったことも金属加工産業の発達に不可欠な要素となったようだ。

彦兵衛さんが伝えた釣針作り

資材調達面での必要な環境があったとはいえ、職祖・彦兵衛が最初に釣針作りの技術を「モノにする」までには、さすがに艱難辛苦の道程があったようだ。ひと口に「土佐で学んできた」と述べたが、移動の自由がない時代のことである。百姓である彦兵衛が旅をするには、四国霊場の巡礼に扮する必要がある。また土佐を訪れたとて、技術を教えてもらえるつてがあったわけでもなく、高知へたどり着いたのち、鍛冶屋の軒先で行き倒れを装ってその家に入り込んだなどという話がなかば伝説として語り伝えられている。

そうまでして学ぼうとしたものの、やはり重要な焼き入れの技術までは伝授してもらえず、帰郷後に試行錯誤を重ねた後、地元の野鍛冶の言をヒントに壺に炭を入れて焼き入れを行う方法を会得したという。

その後、明治以降の手工業時代には、木炭粉とおがくずに炭酸バリウムを加えたもので焼き入れが行われるようになり、さらに今日ではガス浸炭焼き入れになっているが、尖頭・成型・焼き入れという手順は、オートメーション化された今日までそう大きくは変わっていない。

こうして自ら苦心惨憺して身に着けた釣針作りの技術を、彦兵衛はさして惜しむでもなく弟子や同業者に教えたという。これによって釣針製造技術が農閑期の内職としてこの地に広まり、地場産業としての下地を作っていった。この地で彦兵衛よりも早くから釣針作りをしていた人物の記録もあり、彦兵衛自身、あるいはそうした先達の姿にヒントを得た可能性も否定

はできないが、技を広め、ひとつの集団を育てていった功績は、職祖と呼ばれるにふさわしい。

今日では、レジャー用の釣針の多くが鋼線を材料として製造されている。太めの針で60カーボン程度（C 0.6%）、細めの針で80～90カーボン程度（C 0.8～0.9%）の鋼線を用い、各メーカーが独自の焼鈍し技術によってそれぞれの持ち味を出しているという。ちなみにステンレス製釣針も製造はされているが、環境問題の配慮から、適度に腐食しやすい鋼材の方が釣針の原材料としてはより適しているとの認識が広がっているようだ。

線材を焼鈍した鉄材（鋼ではなく、鉄を原材料とする方法）に浸炭焼き入れを行う彦兵衛以来の方法は、今日では一部の漁業用のものに限られるようになってきた。その漁業用釣針の需要もいわゆる200カイリ問題以来年々減少し、現在は売り上げ全体の10%程度を占めるのみになってきたという。

「私が付き合いのある岩内町の漁協では30年前に100隻あったスケソウダラの漁船が今は10隻程度にまで減ってしまっています。沿岸漁業が成り立ちにくい時代になってきているんですね。その分、向こう（ロシアなど隣国）が獲った魚を買えといってくるそうです」（兵庫県釣針協同組合・森隆司理事長）。輸出用に力をいれざるをえない所以である。

今日、比率として大きいのはやはりレジャー用で、全体の約70%を占める。市場規模の方も釣針産業全体では2,500億円とも3,000億円ともいわれ期待は大きい。残り約20%が輸出だが、これは多くの輸出産業同様に貿易摩擦問題に関わっている。昨今、鉄鋼材料をめぐる米国との貿易摩擦問題がマスコミでも取り上げられているが、釣針のような最終製品においても、やはり共通の悩みが尽きないようである。

取材・写真協力：兵庫県釣針協同組合、
アควア東条（農水省内水面関連知識普及教育施設）